

留学生のひろば

夢に向かって

聖泉大学 王 進超

私は高校生の頃から日本の文化に興味を持っており、いつか行ってみたいと願っていました。大学に入り専攻は迷わず日本語を選ぶとますます日本に興味が増し、このままだ単位を取って卒業するのはもったいないと思っていたのです。

2007年末、湘潭大学で聖泉大学の唐楽寧先生と谷恵理子さんと出会って留学のことにつきましているいろいろ聞きました。私の留学が決まったのは2008年を控えたある日でした。留学ビザの申請が順調に受理されたので、内定をいただいていた会社を辞退しました。長年憧れていた日本行きでしたが、あまりに急で、心の準備も十分にできないまま、聖泉大学にきました。

留學生活と言えば、人生初めて親元を離れた異国の地で自立することです。家の仕送りに頼って学習に専念してきた中国の大学時代も終わったことをきちんと自覚し、一生懸命勉強するだけではなく、生活費を補うためにアルバイトをしなければなりません。同じ漢字を使っているという過大な共有感から「同文同種」意識にひたりきっていた私にとって日本で暮らしてみると大きなカルチ

ャーショックを受けました。どうやって日本人と相互理解や信頼関係を築くのか、この一年間、大変でしたが、だんだん成長してきた自分の姿を見てそれなりの意味があったとつくづく感じています。

日本語の教員を目指し大学院に進学したいと思っていた私は大学ですっと受験勉強を進めました。アルバイトをしながら勉強することは大変困難ですが、努力すれば必ず報われるという自信を持って、先月大阪市立大学文学研究科に合格できました。これから日本語教員になるためにただ単に日本語を教えるというだけではなく、グローバル化が進んだ現代、私達若者が、どういうことに目を向け、関心を持ち、取り組んでいくかを気づく力を育成することも大事だと考えています。そして、私が留學したいという夢を持ち、大学院に進学したいという夢を持ち、努力して実現したように、今後も常に夢を持ち続けられる人でありたい、夢に向かって失敗や成功を繰り返しながら学んでいくことも大切だと思います。私が教師になったら、この気持ちを忘れずに、生徒たちにもその大切さを伝えて行きたいと考えています。

彦根での生活

聖泉大学 尹 佳

2年前、外の世界を見てみたい、自立を体験したいという思いで、私は故郷を離れ日本への留學を決意し、人生の新しい一步を踏み出した。

この2年間の生活を振り返ると、日本での勉學と生活を維持するために、ほとんど毎日「家—大学—アルバイト先」の3点間の移動のなかでそれなりに充実した日々を送ってきた。多忙な生活のなかで心温まる出来事も数多くあったが、それにしても両親の膝元を離れて、一人で生活するのはそんなに容易なことではなかった。困ったときもあれば辛いときもあった。しかし、「どんなことがあっても乗り越えよう」という信念を持ちつづけて、いつも前を向いて決して諦めないようにがんばってきた。

この2年間、多くの優しい人々と出会い、互いに夢を語りあい励ましあう友人ができたことがとても幸せで、私の宝物だと思っている。そして、いつも「心を広く開いて、日本での留學生活を楽しんでください」と励ましてくださっている日本人の先生、いつも支えてくれている両親、そして私のことを自分の娘のように優しく見守ってくれているバイト先のママさんとマスター、またいろいろと助けてくれた友人の皆さんに心から感謝したい。

この2年間の生活のなかに、私にはどうしても忘れら

れないことがある。昨年四川大地震支援チャリティコンサートで多くの日本の方々が示してくれた温かい心、ボランティアとして養護学校の子供と一緒に遊んだ楽しい1日体験、彦根の夏の風物詩である総踊りで目にしたあの感情豊かで元気一杯で踊っている若者たち、そして満開の美しい桜に囲まれている彦根城の雄姿など。振り返って見ると彦根でのこの2年間は、私にとっても貴重な体験を与え、そのすべて楽しい思い出として私の脳裏に深く刻まれている。「日本」と出会ってから、自然の風景の美しさ、優しい人々の心に魅了され、視野が広がり徐々に成長してきたと実感している。

大学では唐先生のゼミで経営学を中心に勉強し、特に日本企業の中国進出に関する現地化問題や企業戦略について非常に興味を持っていた。大学院に進学しさらに研究を深めようと思って今夏、神戸大学大学院と大阪市立大学大学院を受験したところ、嬉しいことに両方の大学院とも合格することができた。

いよいよ来年3月に彦根を離れ、2年前と同じように新しい人生が始まる私にとっては、もう何も恐れることはない。精一杯頑張って一回り大きく成長したい。

彦根ありがとう。聖泉ありがとう。

編集後記

日本国と中国はあらゆる面で友好が刻々と深まっています、私たち誰もが理解し、関心をもつことで、これからの日中相互の友好交流を一層深めることが末端に課せられた地力、役割かと考えます。

本協会の活動に対しご尽力・ご協力いただきました諸兄姉に、心からお礼申し上げますとともに、皆様ご家族お揃いで新年をお迎えくださるようご祈念申し上げます。

(山村昭男)